opusdei.org

「主を知り、あなた 自身を知ること」 (3) 「聖人たちに 伴われて」

聖人たち、特に聖母の模範は 祈り方を学ぶ大きな助けとな ります。

2022/02/21

イエスは初めて公にエルサレムに上られ、言葉と奇跡を通して本格的に神の国の宣教を始められました。カナでの婚宴中になさった驚くべき出来事以来、彼の名声は徐々に広がっ

ていました。その頃、夜の闇と静寂 に身をひそめて、一人の名の知れた ユダヤ人が話をするためにイエスを 訪れました(ヨハネ3.1参照)。キリ ストのお姿とお言葉はニコデモの心 を深く動かしました。頭の中に沢山 の質問が駆け巡っていた彼は、主と 向かい合って親しく言葉を交わし、 その答えを見つけようと考えたので した。イエスは彼の誠実な心を見 て、すぐに言いました。「誰でも水 と霊とによって生まれなければ、神 の国に入ることはできない」(ヨハ ネ3,6)。

ニコデモは、その場に居合わせれば 誰もが尋ねるであろう質問で会話を 続けます。「それはどういう意味で すか。どうやって再び生まれること ができるのですか」と。実はイエ、 がニコデモに求めていたことは、で なる物事の探求ではありませんでした。 より大切なこと、彼自身の人生 に神が入るに任せることだったので す。聖人になろうと目指すことは、 もう一度生まれ変わるようなもの、 すべてを新たな光で見るようなもの です。もう一人のイエス・キリス ト、キリストご自身になるために、 少しずつ自ら変化し、新しい人にな ることなのです。「キリストの生命 が私たちの中に現れるように努めね ばなりません | (1) と聖ホセマリ アが言われていたように。聖人たち は神の国への歩みを終えました。そ れぞれの人生において山々を登り、 谷間で休み、時にはもう少し暗い奥 まった所にも入り込みながら。だか らこそ聖人たちは私たちの心を希望 で満たすのです。キリストを見出す 方法の一つ、それは正にこの「聖人 たちを通って | です。彼らの生涯 は、すべての信者が、祈り方を学ん でいくそれぞれの道において、重要 な役目を果たすことでしょう。

マリアは嬉しい時に祈ります…

沢山の浮き沈みを経験しながら東奔 西走(とうほんせいそう)している 日々の真っ只中で、祈ることなど私 たちには不可能に見える時もあるで しょう。けれども、私たちの先人で ある聖人たちは、日常生活の中でも 神と活き活きと対話ができることを 証しています。聖人たちの中でも聖 母の証は群を抜いています。彼女は 日々の家族生活において、息子のイ エスと愛情にあふれた親しさのうち に過ごされ、それ故御父との対話も 最も生き生きと経験された方でし た。どんな家族でもあるようにナザ レの家族にも喜びの時もあれば、苦 しい時もあったことでしょう。しか し、聖母はどんな時でも、どのよう な精神状態であっても、絶えず祈っ ておられたのです。マリアの生涯は 私たちに、どんな時にも祈ることを 教えるのです。

例えば、嬉しい時彼女は祈りました。 天使のお告げを受けてすぐ、マ

リアはいとこのエリザベトを訪問し ます。「そのころ、マリアは出かけ て急いで山里に向かい、ユダの町に 行った| (ルカ1,39)。聖母は、も うじき甥が誕生し、いとこの家族が 増えるという喜ばしい知らせを受け 取りました。しかもそれは高齢のザ カリアとエリザベトに全く思いがけ なく起こった大いに祝うべき出来事 でした。「聖ルカが記す二人のいと この出会いの場面はとても感動的で す。喜びと恵みの場に私たちも立ち 会うことができます」(2)。更に聖霊 は、救い主が肉体を持ってそこにお いでになることを洗礼者ヨハネとそ の母親に啓示し、彼女たちの喜びに 加わるのです。エリザベトは自分の 家にマリアが入るや否や、感極まっ て彼女を讃えます。今では普遍的な 祈りとなったあの言葉で。私たちも その祈りを日々繰り返し唱えて、彼 女たちの喜びに深く入り込むので す。「あなたは女の中で祝福された 方です。胎内のお子様も祝福されて

います | (ルカ1,42) と。一方、マ リアはいとこの歓喜に対し、感動で 心を震わせながら応えます。「私の 魂は主をあがめ、私の霊は救い主で ある神を喜び讃えます」(ルカ 1,46-47)。聖伝が「マグニフィカ ト」と名付けている聖母の祈りは、 神の言葉に浸された賛美の祈りとは どういうものかを私たちに示してい ます。「マリアは聖書に精通してお られました。彼女のマグニフィカト は旧約聖書から取られた糸で織り上 げられたタペストリーなのです」(3) というベネディクト16世のお言葉の 通りです。私たちの心が何らかの賜 物をいただいて感謝で満ちている 時、それは祈りの中で神に心を開く 時です。おそらく聖書の言葉を借り つつ、私たちの生活の中で神がな さった偉大な業を認めながら。特に 喜びの時に、感謝を表すことはキリ スト者の祈りの基本的な態度です。

そしてまた苦しみや落胆の時にも…

しかし、聖母は苦しみに直面したり 理解できない状況に立たされたりな ど、暗闇の時にもまた祈られます。 そのマリアの姿は私たちにキリスト 者の祈りのもう一つの基本的な態度 を教えます。そのことは福音書が語 るイエスの死の場面において、簡潔 にしかし明瞭に示されています。 「イエスの十字架のそばには、その 母と母の姉妹、クロパの妻マリアと マグダラのマリアとが立っていたし (ヨハネ9,25)。イエスの母は悲し みに打ちひしがれながらも、そこに とどまられました。彼女は自分の息 子を救おうとも、状況を解決しよう ともしませんでした。理解できない この出来事の説明を神に願おうとも しませんでした。彼女は唯々、イエ スが十字架の上から弱り切った声で 話しておられる事を、一言も聞き逃 すまいとされていたのです。だから こそ、彼女は新たな使命を与えられ た時、ためらうことなくすぐにそれ を受け入れたのです。「『婦人よ、

苦しみの最中に祈るとは何よりも、神のみ旨を愛して自らの十字架がにてす。つまりまることです。人々においたないたがでは、これではいてきないができないができない。祈るとは現時間でもあるとはないははいでくない。その背後にはいりでくらされているという確信をもって現実を

見ることです。そうすれば、私たちもマリアのように「あなたのみことばのとおりになりますように」(ルカ1,38)と繰り返しつつ、人々や状況を受け入れていくことができるようになるでしょう。

最後に、聖母の生涯にはこうした苦 しみとは別の精神状態の中での祈り も見られます。それはマリアが夫の ヨセフと共に大きな不安と心配の中 で祈る姿です。ある日、毎年行って いるエルサレム神殿への巡礼の帰り 道で、二人は12歳の息子がいないこ とに気づいたのです。二人は息子を 探しながら引き返すことにしまし た。ついに学者たちと話をしている イエスを見つけ、マリアは尋ねま す。「私の子よ、なぜこんなことを したのですか。ごらん、お父さんと 私とは心配して捜していたのです よ」 (ルカ2.48) 。私たちも自分の 力不足を感じる時、義務を果たしき れず自分がいるのは場違いのように

思う時など、度々不安に襲われるこ とがあります。そんな時は自分を囲 む世界、生活も召し出しも家族も仕 事もすべてが間違っているかのよう に思えるかもしれません。そして自 分が、期待していた通りに人生を歩 んでいないと考えてしまうこともあ り得ます。過去に抱いていた計画や 望みが無邪気な夢物語に見えてくる のです。そんな私たちと同じよう に、マリアとヨセフも不安の時を過 ごさなければならなかったことを知 ると、励まされます。心配で胸が締 め付けられる思いだった彼らが息子 に理由を尋ねても、安心できる明確 な答えは与えられませんでした。

「『なぜ私を探したのですか。私が自分の父の家にいるはずだと知らなかったのですか』。しかし、両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった」(ルカ2-49-50)。

心配な時、祈れば物事がすぐに簡単 に解決するわけではありません。そ れなら、私たちはどうすればいいの でしょう?聖母が一番良い方法を私 たちに示して下さっています。私た ちの人生の道に忠実であり続けるこ と、いつもの生活を見直し、たとえ 完全には理解できなくても、そこに 神のご意志を見出していくことで す。そして更に、こうした不可解 な、時には暗い影を落とすような出 来事の全てを、聖母がされたよう に、心の中に収めて黙想する、つま り祈りの中でじっくり見ていくこと です。こうして少しずつ、神の現存 をまた感じるようになるでしょう。 そしてイエスが私たちの中で成長 し、再び姿をお現しになるのです (「イエスは彼らと共に下り、ナザ レに帰って、二人に従って生活され た。その母はこれらの記憶を皆心に おさめておいた。そしてイエスは神 と人の前に、その知恵も背丈も寵愛 もますます増していかれるのでだっ た」[ルカ2,51-52])。

聖人伝は私たちの人生と重なる

聖母は我々が切望している神との親 密さを唯一無二の形で体験された方 ですが、聖人たちもまた、個人的に それぞれの固有な方法でそれを経験 しました。「あらゆる聖人は、神の 言葉から流れ出る光線のようなもの です」とベネディクト16世は使徒的 勧告の中で述べられ、幾人かの聖人 の名を挙げられました。「真理の探 求と霊的識別を行った聖イグナチ オ・デ・ロヨラ(1491-1556年)。 若者の教育に情熱をささげた聖ヨハ ネ・ボスコ(1815-1888年)。たまも のと務めとしての司祭職の偉大さを 自覚した聖ヨハネ・マリア・ビアン ネ(1786-1859年)。神のあわれみの 道具となったピエトレルチーナの聖 ピオ(1887-1968年)。聖性への普遍 的召命をのべ伝えた聖ホセマリア・ エスクリバ(1902-1975年)。最も貧 しい人のための神の愛の盲教者、コ

ルカタの福者テレサ(1910-1997 年)। (4)。

私たちがある種の性格やあり方に好 感を持つこと、その人がしている仕 事に特に心が引かれたり、その言葉 が直接私たちの心と知性に響いたり することは、人として至極当然のこ とです。ある聖人の著作を読み、そ の生涯と経験を知ることは、その聖 人と本物の友情を育む最良の方法で す。けれども、もし聖人たちの生涯 やその祈りについて並外れた点ばか りを強調するならば、彼らの模範は 私たちには遠いもの、倣っていき難 いものとなってしまうことでしょ う。

「ペトロやアウグスティヌスやフランシスコのことを覚えているでしょう。母の胎内にいる時から恩恵にかためられていたかのように、聖人の偉業を語る伝記類は読むにたえません。それは素朴な心から出たもので

すが、同時に、教理の知識が不足し ていた結果生まれたものです」と聖 ホセマリアは書いています。聖ホセ マリアは人々のことを、たとえ教会 に列聖された聖人たちであっても、 まるで彼らが完璧な人であったかの ように理想化をしないことが重要で あるといつも強調していました。 「キリストの英雄たちの本当の伝記 は私たちと同じなのです。彼らとて 闘って勝利を得、また闘っては敗北 を喫したものです。そして敗れたと きは痛悔の心を以て再び闘いに赴い たのです」(5)。こうした現実的アプ ローチなら聖人たちの証言はずっと

彼らも私たちと同じ人間であると分かるので。フランシスコ教皇は言われます。「(聖人の中には)自分のお母さんや、おばあさん、他の親しい人たち(2テモテ1:5参照)がいても不思議ではありません。必ずしも彼らの人生は非の打ちどころの

信じやすいものになります。

ないものではなかったかもしれません。それでも彼らは、過ちや失敗を犯しても前向きであり続ける、主の心にかなう者でした」(6)。

こうした人たちの生き方に具現され た祈りを見ると、「祈り」が何かを より深く理解することができます。 聖人たちの事をよく知るならば、そ れが助けとなって何度も新たに祈り を始めるための様々なやり方を見つ けることができるでしょう。例え ば、何か月間も牢獄生活を送った聖 トマス・モアにとって、詩編91が非 常に大きな慰めとなったと知ること で、新たな光を引き出すこともでき るでしょう。「神は羽をもってあな たを覆い翼の下にかばってくださ る。…あなたは主を避けどころと し、いと高き神を宿るところとし た。…彼はわたしを慕う者だから、 彼を災いから逃れさせよう」(7)。殉 教者トマス・モアが牢獄の悲惨さの 中で、前途に待ち受ける惨い死や愛

する人たちの苦しみを想いながら も、詩編から慰めを得たように、私 たちも人生の大小の困難に出くわす 時、詩編によって祈りの道を見出す ことができるかもしれません。

神の愛深い眼差しに感嘆して

聖人たちの事をよく知るならば、彼 らがしていたように日々の出来事の 中で神を見出す助けになります。例 えば次のエピソードを読む時、私た ちの心は動かされるのです。アルス の司祭、聖マリア・ビアンネは、自 分の教区にいる信者で、読み書きの できない一人の農民が、聖櫃の前で 長い時間過ごしていることに気付き ました。ある日、司祭はその男性に 尋ねました。「何を祈っているので すか | 。すると善良なその人は答え ました。「私はあの方を見つめ、あ の方は私を見つめておられます| と。これ以上の答えは必要ないで しょう。この教えはアルスの主任司

祭の心にしっかりと刻まれ、消える ことはありませんでした。カトリッ ク教会のカテキズムは、このエピ ソードを引用して「念祷とは、イエ スへと注ぐ信仰の**まなざし**です | と 教えています(8)。私が主を見つめ、 そしてそれより遥かに大切なこと は、主が私を見つめてくださる。神 様は常に私たちを見つめておられま すが、私たち自身が彼の方に視線を 上げ、主の愛に満ちた眼差しを受け 止め、愛に愛を返そうとする時、そ の時こそ主は特別な愛情で私たちを ご覧になることでしょう。同様の事 が聖ホセマリアにも起こりました。 その経験は彼にとって大変印象深い ものであったため一生の間度々その ことを話題にしていました。彼がま だ若い司祭として司牧活動を始めた ばかりの頃、彼は午前中ずっと告解 場に座って、人々が秘跡に与りに来 るのを待っている時にしばしば耳に 入ってくる、扉が開く音やブリキ缶 がぶつかり合う音が気になり、好奇

心をそそられていました。ついにあ る日、好奇心に負けて、若いホセマ リア神父はその音の正体を見ようと ドアの後ろに隠れました。そこに現 れたのは牛乳缶を運ぶ一人の男でし た。彼は教会の開いた入口に立ち、 聖櫃に声を掛けました。「主よ、こ こに牛乳屋のフアンがおります| と。そうして少しそこに居た後、 去っていきました。あの素朴な人物 は意図せず、若いホセマリアに信頼 に満ちた祈りの模範を与えたのでし た。神父は感嘆し、心の中で何度も 繰り返すのでした。「主よ、ここに ホセマリアがおります。ホセマリア はどうすればあの牛乳屋のフアンほ どの大きな愛であなたをお愛しでき るのか分かりません」(9)。

様々な時代の、様々な背景を持つ多くの聖人たちは、私たちも神様が向けておられる愛情あふれた眼差しを感じ取ることができると証明しています。私たちがどこにいても、私た

ちのこのありのままの姿を神が愛を もって見て下さっていることを、私 たちは聖人たちの言葉によって信じ ることができるのです。何故なら聖 人たちこそが、私たちに先立ってこ うした事実を驚きと感動のうちに発 見した人達だからです。

眠っていても、目覚めていても

前述のとおり、聖人たちの弱さや疲 れを知ることも私たちには役に立ち ます。聖ホセマリアは晩年に、「昨 日は、アヴェ・マリアの祈りを続け て2度集中して唱えることすらでき なかった | と述懐したことがありま す。「どれほど悲しかったことか。 しかし、難しくてうまくできなかっ たが、いつものように祈り続け、申 し上げた。主よ、お助け下さい。私 に託されたこの大きな仕事を前進さ せなければならないのはあなたで す。私が全く取るに足りないことで も、ちゃんとできないことをご存じ

なのですから、いつものように御身 の御手に委ねます」(10)。名誉教皇 ベネディクト16世は聖フィリポ・ネ リについて次のように述べられまし た。「聖フィリッポ・ネリは朝、目 覚めた最初の瞬間から神にこう語り かけました。『主よ、今日もフィ リッポの上にみ手を置いてくださ い。み手を置いて下さらなければ、 フィリッポは御身を裏切るからで す』(11)。また福者グアダルーペ・ オルティス・デ・ランダスリは、あ る手紙の中で、祈っても全く慰めを 感じない時があることを認めていま す。「心の深奥には神様がおられま す。この所、特に念祷の時には、全 くと言っていいほどそのことを感じ ることがないのですが | (12)。また 幼きイエスの聖テレジアは、自叙伝 の中で次のように打ち明けていま す。「本当に私は、聖女どころでは ありません。これだけでも、その良 い証拠です。霊的渇きを喜んだりせ ずに、自分の不熱心と不忠実のせい

であると考えるのが、当然ですの に…。それからまた、念祷やご聖体 拝領後の感謝の間に居眠りをするこ と(もう七年も前から)も、悲しま なければならないはずでしょう。と ころが私は、悲しみません。小さい 子供は眠っていても、目覚めていて も、同じように親の気に入ると思い ます。お医者様も手術をなさる時に は、病人を眠らせるでしょう。とに かく『主は、われらが何でできてい るかを知り、われらの、ちりにすぎ ないことを覚えて』いらっしゃる (詩編102,14)と思います | (13)。

このように、私たちは聖人の証言と 同伴が必要なのです。自分を主の御 手に委ねて、日々主との友情を育ん でいくことは可能であり、価値のあ ることだと確信するために。「本当 に、私たちは皆、誰でも神とのも に心を開くよう招かれていますして また実際にそれが可能なのです。とな して主の御手を放してしまうことな く、主の元に戻る努力を弛まず続け、友人と話をするように主との語り合うよう呼ばれているのです」(14)。

Carlo Marchi

- (1) 聖ホセマリア・エスクリバー、『知識の香り』104。
- (2) 2018年7月13日、スペインのコバドンガにおけるパドレの言葉。
- (3) ベネディクト16世、2005年12月 18日の説教での言葉。
- (4) ベネディクト16世、使徒的勧告 『主のことば』48番。
- (5) 聖ホセマリア・エスクリバー、『知識の香り』76。
- (6) 教皇フランシスコ、使徒的勧告 『喜びに喜べ』3。

- (7) 詩編91,4;9;14。聖トマス・モア、『苦難に対する慰めの対話』参照(第三章は詩編91番の詳細な解説)。
- (8) 『カトリック教会のカテキズム』 2715。
- (9) El Fundador del Opus Dei, Rialp, 1997 Vol.I, Cap. 8, p.501参照
- (10) 聖ホセマリアの1970年11月26 日の言葉。『聖ホセマリアの思い 出』に引用。
- (11) 名誉教皇ベネディクト16世の 321回目の一般謁見演説「聖アル フォンソ・マリア・デ・リグオーリ の祈りに関する教え」2012年8月1 日。
- (12) M. Montero, En Vanguardia: Guadalupe Ortiz de Lnad**á**zuri, 1916-1975, Rialp, Madrid 2019, p. 94

(13) リジューの聖テレジア、「ある 霊魂の物語」原稿 A,76枚目の段落 1 (邦訳は「小さき聖テレジア自叙 伝」ドン・ボスコ社、1981年p. 223)。

(14) J. Ratzinger, "Dejar obrar a Dios", en L'Osservatore Romano, 6-X-2002.

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shuwo-shiru-3-seijin-tachini/ (2025/11/19)